Ⅱ 看護専修学校(3年課程)に社会人入学した学生の意識
——17名のアンケート調査より

日本看護協会 調査研究室
藤田 和夫

はじめに

「1992年看護学生の進路選択に関する調査」において，看護専修学校（3年課程）は，他の課程とくらべて入学者の年齢・性別が均質化しているという結果が得られた。均質化している理由の一つは，さまざまな入学制限が設けられているからである。たとえば性別や年齢，それ以外にも身長・体重についての制限を設けている学校もある。

『'93看護・医療系学校入学ガイド』[1]より各学校の入学制限をみると，看護専修学校の42.9%がなんらかの入学制限を設けていることがわかる。特に年齢において顕著である。たとえば，大学を卒業したあとに，一度なんらかの職に就いたが，人生の方向転換のために看護の道を志した人は，看護専修学校への入学に年齢制限があるため，入学制限の少ない准看護婦（士）養成所に入学せざるを得ないという状況をまねいている。

今回，社会人入学を受け入れている学校の協力を得て，そこで学ぶ学生および卒業生の入学動機や学校生活などについて，学生・卒業生それぞれが，どのように考えているかを把握したので報告したい。

調査方法

社会人として就業経験のある看護専修学校の学生および卒業生17名に，こちらが作成した質問に自由に意見を書いてもらう。

アンケートの内容（別掲）

調査実施時期

平成5年9月1日から10月9日まで

調査の結果

対象者の属性

対象者：国立療養所東京病院附属看護学校 在学生13名，卒業生4名
平均年齢：29.9歳
性 別：女13名，男4名
最終学歴：大学卒業8名，専門学校卒業1名，高等学校卒業8名
既婚者：3名
子どもあり：2名

1. 看護の道を選んだ理由

看護の道を選んだ理由は，「看護の仕事はやりがいがある」「それまでの自分の仕事への疑問」

[アンケートの内容]

1. 看護の道を選んだ理由は，なんですか。
2. 看護学校入学前の看護イメージと，入学後のイメージでは，変化がありましたか．あるとしたらどのような点でしたか。
3. 入学して，なにかとまどったようなことがありましたか。あるとしたらどのようなことでしたか。
4. 看護の道を選んでよかったと思われることはなんですか。
5. 看護の道を志して満足していますか。満足している点，不満な点，それぞれございましたらお書き下さい。
6. 同級生や教員との関係で，気をつかうことはありましたか。
7. 看護学校に入学するのに，どのようなことが大変でしたか。
8. 就学中の授業料や生活費などは，どうやって捻出しましたか。
9. これから，どのような分野で仕事をしていきたいとお考えですか。
10. 現在看護婦（士）として就業中の方にお伺いいたします。就職して，年齢が高いことで，メリット・デメリットがおありでしたか。
11. あなたは，看護学校の社会人入学制度が広がることが必要だと思いますか。必要だとお考えの方，どのような点を考慮すればよいと思いますか。
12. これからの看護界に必要だと思われることはなんだと思われますか。

「看護職との出会いがあった」「生涯を通じてつづけられる仕事であると思ったから」などの意見が多い。具体的な例は次のとおりである。

・「大学の看護学部を受験したが不合格となり，その受験した大学附属病院で看護婦補佐をしていたが，看護のおもしろさ，むずかしさに気づき，看護補佐で終わらせたくなかった」(22歳，看護補佐歴２年)

・「高校生のころから興味があった。その後ボランティアに参加し，看護婦の仕事はすばらしいと感じた」(25歳，会社員歴５年)

・「身近な人間の死。その死のあり方や迎え方に疑問を感じたため」「いままで自分が歩んでいた物質本位，効率主義的人生をみつめ直し，精神的に豊かな生き方をしたかった」(34歳，企画制作デザイナー歴10年，大学卒業)

・「会社のための仕事をしていたことに不満であった」「社会や人のためになる仕事がしたかった」「看護婦の仕事は，拘束時間や労働環境がきついといわれているが，専門職としてやりがいがある」「人の身体は，自分の身体におき換えて，勉強させられることが多い」「従兄弟の入院時の看護婦の姿に感動した」(23歳，一般事務歴３年)

・「結婚後も継続してできる仕事を考えていたとき，寝たきりの祖母のもとに保健婦さんが訪問にきて，保健婦という仕事を知り，志そうと思った」(30歳，会社員歴５年６か月)

・「看護の仕事は，他の人々の役に立てて，やりがいのもてる道だと感じた」(32歳，一般事務歴4年)
・「ターミナルケアに興味があった」「すべての人間には必ず生と死があるが，看護はその人間の一生すべての期間にわたって重要な役割を果たしている」「病み，苦しむ人の助けとなりたかった」(26歳，大学卒業)
・「やりがいがあり，自分の生涯を通じてつづけることのできる職業であると思えた」「自分の生き方を看護のなかに見出せると感じた」(32歳，会社員歴2年，大学卒業)
・「母親が半年ほど入院したとき，病院で働く看護婦さんをみて，人の苦しいときに力になれる知識と技術を身につけたい，と強く感じた」「一生働ける職業なので，いまからでも遅くないと思った」(25歳，事務員歴6年)
・「仕事をやめて自分がほんとうにやりたいことはなにか悩んでいたとき，偶然看護助手の仕事をみつけた。助手として1年間病院に勤務したとき，苦しむ患者さんをみても，自分はなにもできないということ，知識と技術をもたないことがいかに無力であるか，歯がゆさと腹立たしさを感じた」(30歳，会社員歴5年，大学卒業)
・「家族の病気や死に向かいあったときの看護婦の態度や仕事の様子をみて，やりがいのある仕事であると思えた」(30歳，教員歴2年，大学卒業)

2. 看護学校入学後の看護イメージの変化と戸惑い

入学前にもっていた看護イメージは狭いものであったが，「入学して看護のすばらしさがわかった」という，肯定的な変化を記載してきたのは10名であった。「規則が厳しい」「ゆとりがない」などの否定的変化が4名，特に変化なしが2名，無回答1名であった。

看護学校入学後の看護イメージの変化については次のとおりである。

・「非常に創造性の高い仕事であるということに気づいた。いままで知っていた看護というものは，もっと管理主義的・画一的なものであると思っていたが，全くの思い込みであると感じた。技術のみでなく思想なのであると，イメージが変化した」
・「看護はやさしさだけではなく，知識を十分にもっていないとよい看護ができないという点に気づいた」
・「入学前は，医師の手伝いや注射などのイメージが強かった。入学後は，日常生活の援助が多く，注射や診察の介助はほんの一部でしかないことがわかった。また記録や看護研究などは頭を使う仕事だと思う」
・「患者さんの不便さを解消するということだけではなく，自立を中心に考えるという点に気づいた」

入学して戸惑ったことは，「年齢差のある同級生との接しかた」「規制が多い」「ゆとりがない」「授業中の私語が多いこと」などの意見に分けることができる。入学して戸惑ったことの例は次のとおり。

・「学生の管理が厳しすぎる。もっと学生自身の判断や自主性を育てるものであったほうがよい」
・「真摯であったり，ひたむきであることが恥ずかしいことのように扱われるクラスの雰囲気」
・「授業中の私語の多さには大変迷惑している。年代は違っていても同じ目標をもっているとい

うことで，グループワークなどではいろいろな意見交換ができるだろうと期待していた。しかし，必ずしも熱心な人ばかりではなく，安易にすませようとする傾向もあり，残念」

3. 看護の道を選んだことでの満足や不満

看護の道を選んでよかったことは，「看護の奥深さ」「やりがい」「重要性がわかった」などで，全員が看護の道を選んだことはよかったと答えている。また看護の道を志したことで，満足している点と不満な点それぞれについて聞いてみると，「満足している」とのみ答えている者７名，「不満のみ」と答えている者２名，「満足・不満両方」と答えている者７名，「まだ答えることができない」と答えている者１名であった。

満足している例は，次のとおりである。

・「人間の命に直接かかわり，人間と正面から向き合う看護の仕事は，どんな時代でも，どんな世界でも必要とされている。またいろいろな分野があり，幅も広く奥も深いので，これから多くの選択肢をみつけられることもよかった」
・「非常に創造的で終わりのない道であることが認識できた。あらゆる時間，空間を越えて，必要とする人に力を貸すことのできる職業であるということが理解できた」
・「患者の生きざまにふれ，教えられることが多い」

不満な点としては，「忙しすぎる」「社会的評価が低い」などの意見がある。

不満なことの例は，次のとおりである。

・「時間に追われ，気持ちのゆとりがもてない」
・「実習に出ると，学内で学んできたことと実際とではギャップがある」
・「日本においてあまりに看護の質が注目されておらず，国民が看護職に対して理解していない」
・「社会人に別ルートの卒業のしかたがあっていいと思う」

4. 学生生活を送るうえで困難だったこと

同級生や教員との関係で，気をつかうことがあったかという問いに対して，「同級生に気をつかった」と答えている者14名，「同級生に気をつかったことはない」と答えている者３名と，多くは同級生に気をつかっている。

「教員に気をつかった」と答えている者は３名，「教員に気をつかったことはない」と答えている者７名，「無回答」７名と，同級生にくらべて，教員にはあまり気をつかっていないことがわかる。

同級生に気をつかった例は，次のとおりである。

・「年齢や価値観の違いがあるため，気をつかった」
・「こちらが年長であるため，気をつかわせているのではないかと思った」
・「自分がいることで同級生がある種，緊張するのがわかるときは，話に入らないよう，席をはずすようにしている」

このような対人関係は，慣れによって徐々に解消される場合もあろうが，年齢によって意識の相違があることは，いたしかたないといえよう。むしろこのような意識の相違があることを通じて意識の多様性を知ることも，貴重な体験学習ではないかと思われる。

教員に関しては，次のとおり肯定的意見である。

・「教員と話すときは自然体でいられる」
・「教員からは，よく教えていただき感謝している」

なお，「気をつかったことがある」と答えた者

3名は，具体的な記述はなされていない。

5. 入学するのに大変だったこと

看護学校に入学するのに，「特に大変ではなかった」と答えている者3名を除いて，「受験勉強が大変だった」「働きながら受験勉強をするのは大変」という声が多い。また「年長者や男性を入学させてくれるか否かについての情報がなかった」という記述もあった。なかには，「せっかく勉強しても，年齢のハンディだけで落とされてしまうのではないかと，情報がないだけに精神的にまいった」(34歳，女性，大学卒業）という意見や，実際に「都立の学校で，年齢が高いというだけで，面接で落とされたのが残念」(40歳，男性，大学卒業）などの意見もあり，学校側の受け入れ体制や意識の問題などが推察される。

6. 生 活 費

就学中の授業料や生活費などは，「これまで働いて貯めてきた貯金から」12名，「アルバイト」3名，「親からの援助」10名，「奨学金」3名（複数回答）であった。

このなかには，「受験を決心してからの1年間，ひたすら倹約して貯金を増やした。車を売ったり，以前働いていた会社の株を処分した」などの厳しい実例もある。

7. 将来どのような分野で仕事をしていきたいか

今後，どのような分野で仕事をしていきたいかという問いに，「病院」8名，「まだ具体的には決めていない・考慮中」3名，「保健婦として」1名，「その他」5名。「その他」にはさまざまな意見があり，「社会的弱者のための看護職でありたい。たとえば経済的に不利な立場にある人，不法就労の外国人など，いずれは海外で」「医療福祉分野」「精神・神経系」「老人病院・ホスピス」「外来で精神面を重視したセルフケアにつながるような看護を行いたい」などである。

実際には，まだ実習をすべて終わった段階ではないので，「まだ具体的には決めていない・考慮中」という意見や，「その他」でさまざまな意見が出るのはやむを得ないと思われる。

8. 年齢が高い者が実際に就職してみて

実際に看護婦（士）として就業している4名について，年齢が高いことでのメリット・デメリットに関する意見をみると，次のとおりである。

・「年齢が高いことでのメリット・デメリットについては考えたことがない」
・「自分の立場をどう考えたらいいか戸惑うことはある」
・「同僚から励まされたり，人間関係が濃くなったりして，メリットを感じることのほうが多いが，働ける年数が限られているので，経験できる科が限られてくるのが残念に思う。これがデメリットかもしれない」
・「人間の個別性や多様性を多く経験できていた」

年齢が高い分だけ社会的経験も多く，その持ち味が生かされる可能性が高い。

9. 社会人入学制度を広げることについて

「看護学校の社会人入学制度が広がることが必要だと思いますか。必要だとお考えの方，どのような点を考慮すればよいと思いますか」との問いに，「必要がある」と答えた者，あるいは考慮すべき点を記述している者は15名と，ほとんどが「必要がある」と答えている。その理由として，

「看護の世界しか知らない看護職ばかりではなく，いろいろな経験をもつ人間が加わることによって，看護の新しい展開がはかれると考える」「異質な人間が加わることによって，現役入学生の人たちの視野が広がるのではないだろうか」という意見があった。なかには，理由ははっきりと書いてはいないが，「わざわざ社会人入学と銘打つことはない」という意見が1名あった。この理由は，看護専修学校に，さまざまな年齢の人たちが，もっと普通に入学できる風潮であってもよいのではないかという解釈もできる。

また「社会人入学枠以外にも，2年で卒業できるといった別コースが必要」「高卒時点で職業選択するには，少し無理があるような気がする」という意見もある。

社会人入学を広げる際に考慮すべき点として，次のような意見があった。

・「入試科目を論文や面接を主体とする」
・「在学中の経済的援助措置がほしい」
・「たった1人ぽつりと入学させるのではあまりに孤独であると思う。社会人がある程度の数でまとまって入ってほしい」
・「いまのような押しつけの管理のしかたでは，社会人にまで広がらない」
・「社会人入学の選抜枠を設けてほしい」

10. これからの看護界に必要だと思われること

社会人として一度就職したことがある学生たちは，これからの看護界に次のような意見をもっている。

・「余裕をもって仕事をすること」
・「自分の看護哲学をもった看護職が増えること」
・「看護を国民に理解してもらうため，社会に向けて発言する場や機会を拡大すること」
・「より自分に厳しくするために，看護婦免許の終身免許制を改正する」
・「幅広い人間教育」
・「看護婦の確保と，自己啓発できるくらいのゆとりが必要」
・「教育内容，レベルの差をなくしていくこと」
・「医学知識」
・「現象や対象に対して幅広い理解ができる人材の参加」
・「社会をいろいろと経験し，視野や受容の枠が広い社会経験者の参加」
・「看護婦の待遇改善」

ま と め

自由記述を読んだ結果，一度社会に出て，自分がほんとうにやりたかったことがなにかという自問自答のプロセスを経た学生は，目的意識がしっかりしていると思われる。目的意識がしっかりしているがゆえに，厳しい規則や厳しい経済的状況におかれていても頑張っている。

高校卒業後すぐに進学してきた同級生などは，授業中に私語や居眠りなどをしているが，そのような態度に対しても批判的意見をもっており，学生として真摯な態度で臨んでいる。

看護職として就職した卒業生の意見を読むと，年長であるがゆえのメリットもある。このような点から，社会人入学は意味があるといえよう。

特に大学卒業者は，自由記述を読んでも目的意識や自分の意見がしっかりしており，今後期待したいところである。また，意見のなかにもあったように，大学卒業者の場合，高校卒業者とは異なったコースがあってもよいのではないかと思われ

る。たとえば，履修する一般教養科目などは大学の単位数の振り替えができるように，看護学校運営指定規則を見直すことなどは今後検討すべき課題であろう。

今回は，実際に社会人経験をもつ看護学生および卒業生に対するアンケートから，社会人入学の実態の一部を紹介したが，あくまでも事例研究の延長線上である。今後，数量的に全国の看護専修学校の受験でどの程度社会人が受験しているのか，またどの程度の社会人入学者がいるのかなどの把握が必要と考えている。

最後に，本調査の調査票配布・回収など多大なご支援をいただいた国立療養所東京病院附属看護学校副校長関根龍子氏，専任教官秋山智氏に感謝いたします。

〈参考文献〉

1. '93看護・医療系学校入学ガイド，さんぽう，1992.